

編集後記

江頭 由太郎 大阪医科大学病理学教室

“症例が先生”，“症例に学べ”と言われるように，消化管画像診断学の日々の研鑽の基本は“症例検討”にある。また，丁寧に詳細な“症例検討”の繰り返しと積み重ねが，本邦の消化管画像診断学の発展に寄与したところは大きい。研究会や学会，あるいは症例報告論文において，“症例”を“検討”の場に提示する手段が消化管画像プレゼンテーションである。これまで消化管画像プレゼンテーションに関する解説書や指南書の類が出版されたことはほとんどなく，もちろん，本誌で特集が組まれたこともない。そこで，本特集では「消化管画像プレゼンテーション」を取り上げ，食道・胃・小腸・大腸の各分野のエキスパートに消化管病変のプレゼンテーションの基本と実際を解説していただいた。本特集は八尾建史（福岡大学筑紫病院内視鏡部）が発案し，齊藤裕輔（市立旭川病院消化器病センター）と江頭由太郎（大阪医科大学病理学教室）を加えた3人で企画を進めた。

まずは，序説にて齊藤が消化管病変診断の基本手順を概説した。

主題では高木（食道），八尾（胃），鶴田（小腸・大腸—腫瘍性疾患），松本（小腸・大腸—炎症性疾患）が，画像プレゼンテーションに必要な基本的検査手技，画像提示のポイント，画像所見と肉眼病理所見・組織病理所見の対比検討手順などを，実

際の症例の提示とともに概説した。病理標本の取り扱いの基本手順として，二村が切除標本の取り扱いとマクロ写真撮影について述べ，江頭は組織学的マクロ再構築図の基本的な作成手順と作成実例を解説した。

主題関連では竹内（食道），土山（胃），山野（大腸）が，画像所見と肉眼病理所見・組織病理所見の対比法の詳細を，特に対比に必要なランドマーク（目印点）の工夫に焦点を当て，解説された。

人気のレストランのレシピは秘匿され公開されることはないが，本号では消化管疾患各分野のトップランナーが消化管画像プレゼンテーションのとおきのノウハウを隠すところなく披露しているのである。これを見逃す手はないだろう。

本号は消化管画像プレゼンテーションの指南書であるとともに，消化管画像プレゼンテーションを通して消化管画像診断学自体を俯瞰する内容となっている。本号が，初学者の消化管画像プレゼンテーションのお手本となると同時にエキスパートにも参照いただける座右の書となることを期待する。最後に，ご多忙の中，“プレゼンテーションの基本”について達人らしく明解に執筆いただきたいという難しいリクエストに応え，快く執筆していただいた先生方に深謝を申し上げて編集後記としたい。